

柑子一籠・種々の物送り給ひ候。

法華經第七の卷薬王品に云はく「衆星の中に月天子最も為れ第一なり。此の法華經も亦復是くの如し。千万億種の諸の經法の中に於て最も為れ照明なり」云云。文の意は虚空の星は或は半里、或は一里、或は八里、或は十六里なり。天の満月輪は八百里にてをはします。華嚴經六十卷或は八十卷、般若經六百卷、方等經六十卷、涅槃經四十卷・三十六卷、大日經、金剛頂經、蘇悉地經、觀經、阿弥陀經等の無量無辺の諸經は星の如し、法華經は月の如しと説かれて候經文なり。此は竜樹菩薩・無著菩薩・天台大師・善無畏三蔵等の論師人師の言にもあらず、教主釈尊の金言なり。譬へば天子の一言の如し。又法華經の薬王品に云はく「能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し。一切衆生の中に於て亦為れ第一なり」等云云。文の意は法華經を持つ人は男ならば何なる田夫にても候へ、三界の主たる大梵天王・釈提桓因・四大天王・轉輪聖王・乃至漢土日本の国主等にも勝れたり。何に況んや日本国の大臣・公卿・源平の侍・百姓等に勝れたる事申すに及ばず。女人ならば橋戸迦女・吉祥天女・漢の季夫人・楊貴妃等の無量無辺の一切の女人に勝れたりと説かれて候。

今此を案ずるに經文の如く申さんとすればをびたゞしき様なり。人もちみん事もかたし。此を信ぜじと思へば如来の金言を疑ふ失は經文明らかに阿鼻地獄の業と見へぬ。進退わづらひ有り、何がせん。此の法門を教主釈尊は四十余年が間は胸の内にかくさせ給ふ。さりとはとて御年七十二と申せしに、南閻浮提の中天竺、王舎城の丑寅耆闍崛山にして説かせ給ひき。今日本国には仏御入滅一千四百余年と申せしに來たりぬ。夫より今に七百余年なり。先一千四百余年が間は日本国の人、国王・大臣乃至万民一人も此の事を知らず。今此の法華經わたらせ給へども、或は念仏を申し、或は真言にいとまを入れ、禅宗・持斎など申し、或は法華經を読む人は有りしかども、南無妙法蓮華經と唱ふる人は日本国に一人も無し。日蓮始めて建長五年夏の始めより二十余年が間、唯一人当時の人の念仏を申すやうに唱ふれば、人ごとに是を笑ひ、結句はのり、うち、切り、流し、頸をはねんとせらるゝこと一日二日・一月二月・一年二年ならざれば、こらふべしともをばえ候はねども、此の經の文を見候へば、檀王と申せし王は千歳が間、阿私仙人に責めつかはれ身を床となし給ふ。不輕菩薩と申せし僧は多年が間悪口罵詈せられ刀杖瓦礫を蒙り、薬王菩薩と申せし菩薩は千二百年が間身をやき、七万二千歳ひぢを焼き給ふ。此を見はんべるに、何なる責め有りとも、いかでかさておき留むべきと思ふ心に、今まで退轉候はず。

然るに在家の御身として皆人にくみ候に、而もいまだ見参に入り候はぬに、何と思し食して御信用あるやらん。是偏に過去の宿殖なるべし。來生に必ず仏に成らせ給ふべ

き期この来たりてもよ催をすこゝろなるべし。其の上経文には鬼神の身に入る者は此の経を信ぜず、釈迦仏の御魂の入りかはれる人は此の経を信ぜずと見へて候へば、水に月の影の入りぬれば水の清むがごとく、御心の水に教主釈尊の月の影の入り給ふかとたのもしく覺へ候。

法華經の第四法師品に云はく「人有げって仏道を求めて一劫の中に於て合掌して、我が前に在ほって無数の偈を以て讚さんぶつめん。是の讚よ仏に由るが故に無量の功德を得ん。持経者を歎美せんは其の福復また彼に過ぎん」等云云。文の意は一劫が間教主釈尊を供養し奉るよりも、末代の浅智なる法華經の行者の、上下万人にあだまれて餓死びくすべき比丘等を供養せん功德は勝るべしとの経文なり。一劫と申すは八万里など候はん青めの石を、やすりを以て無量劫磨が間磨ずるともつきまじきを、梵天三鉢ぼんてんさんしゆの衣と申して、きはめてほそくうつくしきあまの羽衣はごろもを以て、三年に一度下りてなづるに、なでつくしたるを一劫と申す。此の間無量の財たからを以て供養しまいらせんよりも、濁世の法華經の行者を供養したらん功德はまさるべきと申す文なり。此の事、信じがたき事なれども、法華經はこれにてい、をびたゞしく、まことしからぬ事どもあまたはんべり。又信ぜじとをもえば多宝仏は証明を加へ、教主釈尊は正直の金言となのらせ給ふ。諸仏は広長舌こうちやうぜつを梵天につけぬ。父のゆづりに母の状をそえて賢王せんじの宣旨を下し給ふがごとし。三つこれ一同なり、誰かこれを疑はん。

されば是を疑ひし無垢論師むくろんしは舌五つに破れ、嵩法師わすうは舌たゞれ、三階禅師さんがいぜんしは現身に大蛇となる。徳一は舌八つにさげにき。其れのみならず、此の法華經並びに行者を用ひずして、身をそんじ、家をうしない、国をほろぼす人々、月支しんだん・震旦しんだんに其の数をしらず。第一には日天あした朝あしたに東に出で給ふに、大光明を放ち天眼てんげんを開いて南閻浮提なんえんぶだいを見給ふに、法華經の行者あれば心に歡喜し、行者をにくむ国あれば天眼てんげんをいからして其の国をにらみ給ふ。始終用ひずして国の人にくめば、其の故と無く軍いくさをこり、他国より其の国を破るべしと見えて候。

昔徳勝童子とくしょうどうじと申せしを幼さなき者は、土の餅を釈迦仏に供養し奉りて、阿育大王と生まれて閻浮提の主と成りて結句は仏になる。今の施主の菓子等を以て法華經を供養します、何いかに十羅刹女等じゅうらせつによも悦ことごとび給ふらん。悉くことごと尽くしがたく候。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

二月十七日

日 蓮 花 押

松 野 殿 御 返 事